

The Mother Lake Goals Evaluation Report

マザーレイクゴールズ（MLGs）評価報告書

「シン・びわ湖なう 2026」



Mother Lake
Goals

マザーレイクゴールズ（MLGs）学術フォーラム



Mother Lake Goals

変えよう、あなたと私から

Contents

The Mother Lake Goals Evaluation Report 2026

マザーレイクゴールズ（MLGs）について -----	1
MLGs13 のゴール-----	3
「シン・びわ湖なう」について -----	4
ゴールの評価手法 -----	5
MLGs 学術フォーラム 学術委員一覧 -----	6
総合評価 -----	7
オープンデータについて -----	9

各ゴールの評価

Goal 1	● 清らかさを感じる水に -----	11
Goal 2	● 豊かな魚介類を取り戻そう -----	13
Goal 3	● 多様な生き物を守ろう -----	15
Goal 4	● 水辺も湖底も美しく -----	17
Goal 5	● 恵み豊かな水源の森を守ろう -----	19
Goal 6	● 森川里湖海のつながりを健全に -----	21
Goal 7	● びわ湖のためにも温室効果ガスの排出を減らそう -----	23
Goal 8	● 気候変動や自然災害に強い暮らしに -----	25
Goal 9	● 生業・産業に地域の資源を活かそう -----	27
Goal 10	● 地元も流域も学びの場に -----	29
Goal 11	● びわ湖を楽しみ愛する人を増やそう -----	31
Goal 12	● 水とつながる祈りと暮らしを次世代に -----	33
Goal 13	● つながりあって目標を達成しよう -----	35

各ゴール・指標間の関係性

2025（令和 7）年度に琵琶湖で生じた事象間の関係性 -----	39
琵琶湖とその流域で生じた事象の年表 -----	41
MLGs と琵琶湖・流域の関係性の図 -----	43

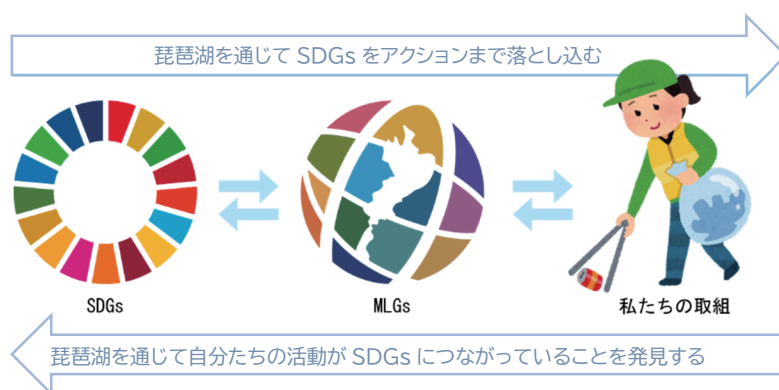
マザーレイクゴールズ (MLGs) について

マザーレイクゴールズ(以下「MLGs」と言います。)とは、「琵琶湖」を切り口とした2030年の持続可能社会への目標(ゴール)であり、「琵琶湖版のSDGs」です。MLGsは、琵琶湖版のSDGsとして、2030年の環境と経済・社会活動をつなぐ健全な循環の構築に向け、琵琶湖を切り口として独自に13のゴールを設定しています。

SDGs と MLGs

SDGsの視点から見ると、琵琶湖を通じてSDGsをアクションまで落とし込む仕組みがMLGsであり、MLGsの取組はSDGsの達成に貢献するものです。

MLGsからの視点で見ると、琵琶湖を通じて、石けん運動以来40年にわたる県民等多様な主体による活動がSDGsにつながっていることを発見する仕組みと言えます。



ロゴマーク・キーコンセプト



Mother Lake Goals

変えよう、あなたと私から

MLGsのロゴマークは、琵琶湖を中央に配し、周囲には円形の中に13のゴールカラーを配置しました。円形は琵琶湖を取り巻く湖国・滋賀を、そして地球を表現しています。「琵琶湖は暮らしを映す鏡」「琵琶湖は地球環境を見通す窓」であることを表し、琵琶湖・滋賀から世界を変えるための目標であることを示しています。

キーコンセプトは「変えよう、あなたと私から」。変化のはじまりは「あなたと私」。2人が協力し、小さなことを積み上げ、共に変わっていくことが連鎖して、点が線に、線が面へと広がり、社会全体の変化につながっていきたい。そんな思いをこの言葉に込めました。

MLGs 13 のゴールカラー

MLGsの13のゴールは、日本の伝統色で表現しています。また、SDGsのカラーとは違い、彩度を薄く、かつマットな色で表しています。

SDGsをより身近にする目標がMLGsであることから、生活に「溶け込む」ことを目指し、より調和のとれた色合いでゴールを表現しています。

アイコンは、組み合わせさったときの「つながり」を意識したシンプルなデザインで表現しました。



ゴール	ゴールカラー
1 清らかさを感じる水に	露草色（つゆくさいろ）
2 豊かな魚介類を取り戻そう	藍色（あいいろ）
3 多様な生き物を守ろう	苔色（こけいろ）
4 水辺も湖底も美しく	鼈甲色（べっこういろ）
5 恵み豊かな水源の森を守ろう	千歳緑（ちとせみどり）
6 森川里湖海のつながりを健全に	青碧（せいへき）
7 びわ湖のためにも 温室効果ガスの排出を減らそう	京紫（きょうむらさき）

ゴール	ゴールカラー
8 気候変動や自然災害に強い暮らしに	紅桔梗（べにききょう）
9 生業・産業に地域の資源を活かそう	黄檳染（こうろぜん）
10 地元も流域も学びの場に	檳染（はじぞめ）
11 びわ湖を楽しみ 愛する人を増やそう	今様色（いまよういろ）
12 水とつながる祈りと暮らしを次世代に	黄唐茶（きがらちゃ）
13 つながりあって目標を達成しよう	紺色（こんいろ）



MLGs 13 のゴール



Goal 1 清らかさを感じる水に

アオコや赤潮などのプランクトンの異常発生が抑制され、飲料水としても問題がなく、思わず触れたくなるような清らかな水が維持される



Goal 2 豊かな魚介類を取り戻そう

在来魚介類の生息環境が改善し、資源量・漁獲量が持続可能な形で増加するとともに、人々が湖魚料理を日常的に楽しむ



Goal 3 多様な生き物を守ろう

生物多様性や生態系のバランスを取り戻す取組が拡大し、野生生物の生息状況が改善するとともに、自然の恵みを実感する人が増加する



Goal 4 水辺も湖底も美しく

川や湖にゴミがなく、砂浜や水生植物などが適切に維持・管理され、誰もが美しいと感じられる水辺景観が守られる



Goal 5 恵み豊かな水源の森を守ろう

水源涵養や生態系保全、木材生産、レクリエーションなどの多面的機能が持続的に発揮される森林づくりが進み、人々が地元の森林の恵みを持続的に享受する



Goal 6 森川里湖海のつながりを健全に

森から湖、海に至る水や物質のつながりが健全に保たれ、湖と川、内湖、田んぼなどを行き来する生き物が増加する



Goal 7 びわ湖のためにも 温室効果ガスの排出を減らそう

日常生活や事業活動から排出される温室効果ガスを減らす取組が広がり、琵琶湖の全層循環未完了などの異変の進行が抑えられる



Goal 8 気候変動や自然災害に強い暮らしに

豪雨や渇水、温暖化などの影響を把握・予測し、そうした事態が起きても大きな被害を受けない暮らしへの転換が進む



Goal 9 生業・産業に地域の資源を活かそう

地域の自然の恵みを活かした商品や製品、サービスが積極的に選ばれ、地域内における経済循環が活性化し、ひいては環境が持続的に守られる



Goal 10 地元も流域も学びの場に

琵琶湖や流域、自分が生活する地域を環境学習のフィールドとして体験・実践する機会が豊富に提供され、関心を行動に結びつけられる人が増加する



Goal 11 びわ湖を楽しみ 愛する人を増やそう

レジャーやエコツーリズムなどを通じて自然を楽しむ様々な機会が増え、琵琶湖への愛着が育まれる



Goal 12 水とつながる祈りと暮らしを次世代に

水を敬い、水を巧みに生活の中に取り込む文化や、水が育む生業や食文化が、将来世代へと着実に継承される



Goal 13 つながりあって目標を達成しよう

年代や性別、所属、経験、価値観などが異なる人同士、また異なる地域に住まう人同士がつながり、琵琶湖や流域の現状、これからについて対話を積み重ね、その成果を共有できる機会が十分に提供される

「シン・びわ湖なう」について

MLGsで設定した13のゴールについては、目標の達成に向けた進捗状況を随時把握していく必要があります。「シン・びわ湖なう」は、毎年夏頃に開催される「MLGsみんなのBIWAKO会議」に合わせて、マザーレイクゴールズ学術フォーラムが取りまとめるMLGsの評価報告書です。各ゴールに関連する様々な指標を設定し、学術的な観点からその評価を行います。評価は、原則として報告書発刊の前年度のデータに基づいて行いますが、それが困難な場合には、評価時点で入手可能な最新のデータを用いることとしています。こうした方法は、2015年9月の国連サミットで採択された持続可能な開発目標(SDGs)においても、その進捗を測るためのグローバル指標の枠組みとして承認、運用されています。

一方で、SDGsの評価とこの「シン・びわ湖なう」にはいくつかの違いがあります。まず、MLGsでは、各ゴールの評価だけでなく、ゴール間の関係性や俯瞰的な評価にも重きを置いています。本書の後半では、琵琶湖とその流域で生じた事象を年表形式でまとめたり、関係性を図で描いたりすることで、MLGsに関わる様々な要素がどのように影響しているのかを理解できるようにしています。「総合評価」では、ゴール間の複雑な関係を踏まえた上で全体として目標に向かっていくために何が必要かについて言及しています。琵琶湖とその流域についてより幅広く知り、ゴール間のつながりについて考える一助となれば幸いです。

また本書では、各ゴールの評価について、各々を専門分野とする有識者がゴールごとに1名ずつ担当しているという特徴があります。SDGsと同様に、評価にあたって採用する指標は学術的かつ客観的なものですが、それを踏まえて各ゴールの状態や傾向をどう評価するかは、ある意味で委員の主観に委ねられています。このような方法を採用したのは、評価の客観性を追求することよりも、そこで提示された独自の評価がきっかけとなって、様々な議論や対話が生まれることを重視しているからです。また、委員独自の視点や指標による評価や提案も生まれやすいと考えています。それこそが、「活動の生態系を築く」MLGsらしさとも言えるでしょう。

本書は、2015 年度から2021年度まで毎年発刊されていた琵琶湖に関するレポート「びわ湖なう」の後継書でもあります。「びわ湖なう」で目指した、「いま、琵琶湖とそれを取り巻く私たちの暮らしがどのような状態にあるのか？これまでどのような経緯をたどってきたのか？」を端的に理解するためのレポートとしての視点は引き継ぎながらも、MLGsの新たな理念を加えて、「シン(新・深・真・進など)」を感じられる評価書としてご活用いただければ幸いです。

－ 5年間の中間評価について －

2021年7月に MLGs を策定してから、2026 年で5年目を迎えます。これまでから MLGs では、2030年のありたい姿の実現に向けてその推移を継続的に把握し、この「シン・びわ湖なう」で、各ゴールに関連する指標の最新状況を整理するとともに、策定以降の変化や傾向をとりまとめています。

そこで、2026年に MLGs の策定から5年という節目を迎えることから、各ゴールの指標について現状や推移をあらためて確認し、2030年に向けた進捗状況を整理します。

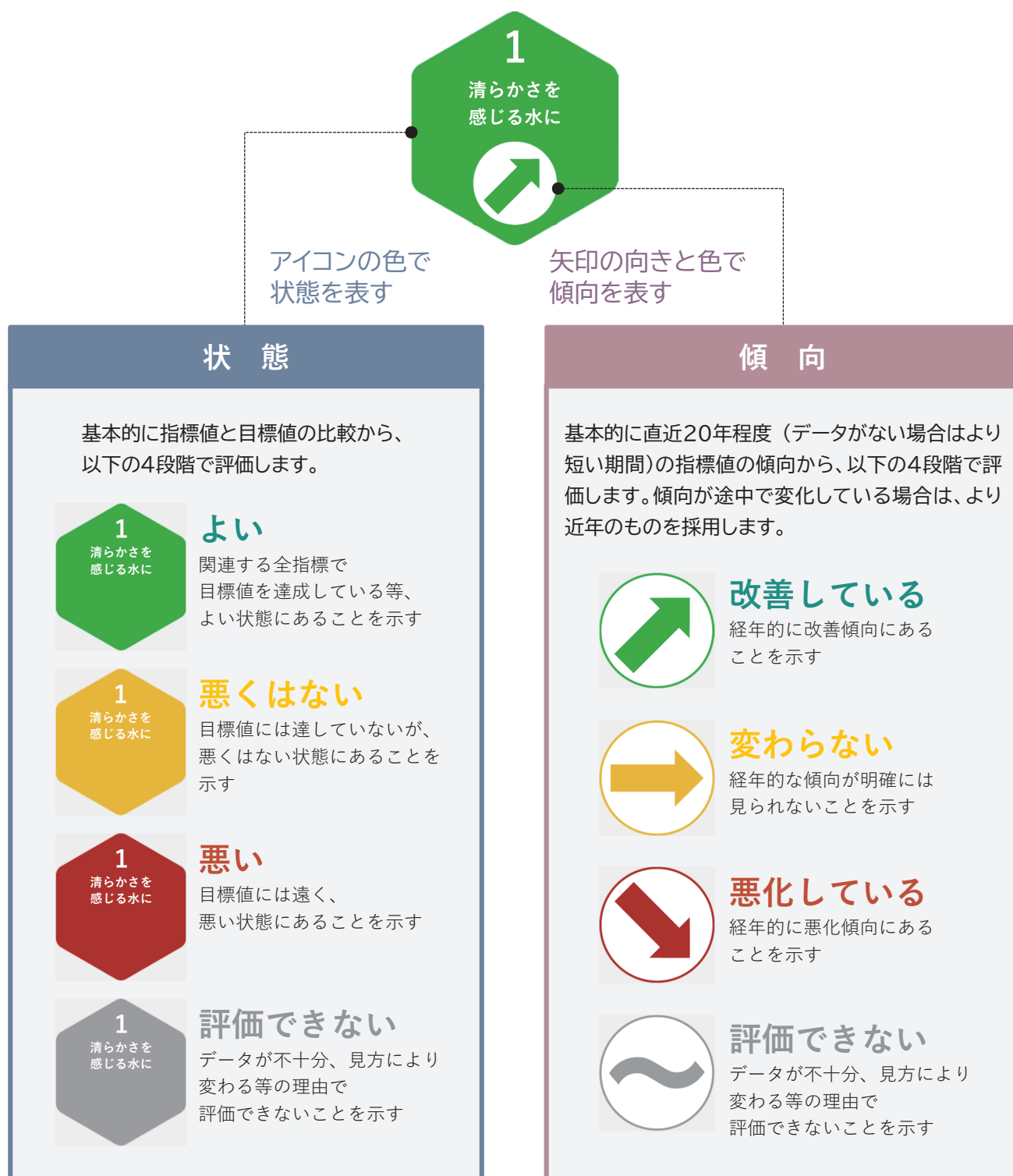
こうした振り返りを通じて、2030年に向けた取組をさらに前進させるとともに、その先の未来を見据えた「ポスト MLGs」の検討につなげていきます。

ゴールの評価手法

本報告書では、MLGsに関連する指標のうち、①環境や社会の状態を表す指標（アウトカム指標）であること、②経年変化が把握できること、③目標との関連が深いこと、という3つの視点から、琵琶湖と暮らしの健全性を評価する上で「鍵となる指標」の選定を行います。

評価は、「いまどのような状態にあるのか」および「これまでの傾向はどうか」という2つの観点から行います。

評価の見方



MLGs 学術フォーラム

学術委員一覧

	担当するゴール	所属 役職 氏名	専門分野
1	清らかさを感じる水に	龍谷大学 先端理工学部 教授 岸本 直之	水質システム工学
2	豊かな魚介類を取り戻そう	国立環境研究所琵琶湖分室 分室長 馬淵 浩司	魚類の系統学、分類学 および分子生態学
3	多様な生き物を守ろう	琵琶湖博物館 主任学芸員 川瀬 成吾	魚類系統分類学、水族保全学
4	水辺も湖底も美しく	琵琶湖環境科学研究センター 専門研究員 井上 栄壮	陸水生物学(底生動物、ユスリ カ)、 動物生態学
5	恵み豊かな水源の森を守ろう	京都大学地球環境学堂 准教授 深町 加津枝	造園学・景観生態学
6	森川里湖海のつながりを健全に	琵琶湖環境科学研究センター 専門研究員 水野 敏明	森川里湖海の つながりの視点からの 魚類の生息環境評価
7	びわ湖のためにも 温室効果ガスの排出を減らそう	琵琶湖環境科学研究センター 総括研究員 金 再奎	環境システム学
8	気候変動や自然災害に強い 暮らしに	滋賀大学 経済学部 環境総合研究センター 教授 田中 勝也	環境経済学、 空間データ解析
9	生業・産業に地域の資源を 活かそう	京都府立大学大学院 生命環境科学研究科 准教授 中村 貴子	農業経営学
10	地元も流域も学びの場に	あさがら野 子どもと自然舎 環境教育インストラクター 池田 勝	自然体験型環境教育、 野外教育
11	びわ湖を楽しみ 愛する人を増やそう	マキノ自然観察倶楽部 代表 谷口 良一	森から琵琶湖までの流域で行う 自然を活かした体験活動
12	水とつながる祈りと暮らしを 次世代に	成安造形大学 芸術学部 教授 加藤 賢治	宗教民俗学、地域実践学
13	つながりあって目標を 達成しよう	滋賀県立大学 環境科学部 准教授 平山 奈央子	湖沼政策科学

総合評価



1. 2026 年の総合評価

MLGsで掲げた13のゴールについて、「状態」と「傾向」の2つの側面から、各々を専門分野とする有識者が評価を行いました。その結果をまとめたものが次ページの図表です。

状態については、「よい」が 8%、「悪くはない」が最も多く 61%、「悪い」が 31%でした。傾向については、「改善している」が 23%、「変わらない」が最も多く 38%、「悪化している」が 31%、「評価できない」が 8%でした。昨年同様に、生物多様性や森林、地域文化など、対策と効果の因果関係が複雑で効果が出るまで長い時間を要するゴールについては、評価が低いままとなっています。

一方で、ゴール13については、傾向が「変わらない」から「改善している」に変更されました。MLGs 案内人を核とした様々な取組が継続、拡大してきており、地域における活動の創発につながっていると判断されました。

2. 5 年間の中間評価

この5年間のMLGsの策定と取組により、ゴール達成に向けた活動は着実に広がりましたが、状態に関する評価が変わったゴールはありませんでした。これは5年という短い期間で、琵琶湖とその流域のような広いエリアの自然環境や暮らしに変化がもたらされるのは容易ではないことを表しています。しかし、5年前には想像もしていなかった変化が、琵琶湖・滋賀県で生じていることも事実です。

最も顕著なものは、この5年間ににおけるアユやスジエビ、ビワマスをはじめとする在来魚介類資源量の減少です。特に、漁業者にとって最も重要な魚類資源であるアユの激減は、漁業者のみならず水産物の加工業者や販売業者、釣りや料理を楽しむ人々の暮らしにも直結します。主要な原因の一つと考えられているのが、夏の猛暑や産卵期にあたる9月の少雨などの気象状況の変化です。他にも、餌となる動物プランクトンの不足が生じている可能性や、主要な産卵地である姉川で上流域から流出した土砂が河床に堆積し、産卵に影響したことなども指摘されています。

琵琶湖の水質も大きく変化してきています。2010年代後半以降に顕著に見られるようになった大型の植物プランクトンは、春先に増殖して表層の栄養塩を吸収し、迅速に湖底に沈めてしまうため、夏季に表層で栄養塩、特に窒素が枯渇するようになってきました。そのため、植物プランクトンの増殖が抑えられ、夏季に琵琶湖の表層で透明度が非常に高くなることが観測されています。湖底に沈んだプランクトンは分解する過程で酸素を消費することから、湖底付近が貧酸素状態になる期間が長くなっています。プランクトン相や季節性の変化、湖底の貧酸素化は、そこに生息する他の生物にも影響を与えます。栄養塩の減少や透明度の上昇は、望ましい琵琶湖の状態と考えられてきましたが、その裏で起きている事象に目を向けると、いま琵琶湖は望ましい状態にあると言えるのか、多面的、総合的に評価する必要があります。

アユなどが減少する一方で、ホンモロコには増加傾向が見られています。ホンモロコは重要な水産資源で、その回復は望ましいことですが、長い間不漁が続いていたことや、新型コロナウイルス(COVID-19)の蔓延のため、供給量ほどに家庭や飲食店での需要が回復していません。ワカサギも増加傾向にありますが、元々琵琶湖にいない魚であり、アユと餌の競合や仔魚の捕食なども指摘されていることから、望ましいこととは言えません。水産資源として見ても、アユのように成長段階に応じた多様な需要(氷魚の釜揚げ、あゆ苗、コアユの佃煮など)がありません。このように、魚介類の増減や水質の変化、需要と供給のアンバランスなどが相まって、様々なゴールに悪影響を与えています。

琵琶湖の中だけでなく、それを取り巻く森・川・里でも多くの異変が生じました。伊吹山では、草原植生の衰退に伴う裸地化が進行しており、生物多様性の消失や大雨による土砂流出が大きな問題となりました。2024~25年の米の不作・価格高騰や、全国で問題となっている熊の出没数や人的被害の増加なども、MLGsと無関係ではありません。それぞれに多くの原因が指摘されていますが、気候や生態系、産業構造、人の暮らし方の変化などが密接に関係しています。再生可能エネルギーの導入が進む一方で、一部では森林や河畔林を切り開いて太陽光パネルを敷設したり、メタン排出削減を目的として水田の中干し期間を長期化させたりすることが、生物多様性や治水の面で問題となっています。このように、MLGsのゴールは複雑に絡み合っており、あるゴールの達成につながる事象や取組が、同時に別のゴール達成の障害となることがあります。

この総合評価では、当初からゴール全体を良い状態に高めていくためのキーワードは、地域・流域における「健全な循環」であると訴えてきました。ゴール同士の関係に着目しすぎると「どちらのゴールを優先するか」という選択の問題に行き着いてしまいがちですが、双方に共通する「循環の不健全さ」という根本原因を解決することで、どちらのゴールも達成に近づいていくという考え方であり、その重要性は今もなお変わりません。まずは、環境と経済・社会活動をつなぐ循環の健全性を評価するための「ものさし」を作ること。そして、その「ものさし」も活用して、地域・流域単位で健全な循環を構築するための具体的な対策を実践・拡大していくことがさらに求められます。

明るい兆しもあります。琵琶湖と共生してきた滋賀の農林水産業が、2022 年に「琵琶湖システム」として世界農業遺産に認定されました。「小さな自然再生」と呼ばれる多様な主体の協働をベースとした自然再生の取り組みや、自然共生サイト登録地域も、この 5 年間で大幅に増加しました。コロナ禍は、人と人とのつながりや、滋賀県・琵琶湖の豊かな自然環境を見直すきっかけにもなりました。MLGs 案内人が各地で取組を進め、活動の数も多様性も着実に広がっています。約 150 年前に五個荘の近江商人らが治山治水を目的に始めた植林活動(ゴール 6 の総評参照)のように、私たちも 100 年単位で未来を見据えて、自然環境、暮らし、地域のつながりをつむぎ直していくことが必要です。



	状 態				傾 向				経年変化				
	良い	悪くはない	悪い	評価できない	改善している	変わらない	悪化している	評価できない	2022	2023	2024	2025	2026
1 清らかさを感じる水に						→			↗	↗	↗	↗	→
2 豊かな魚介類を取り戻そう							↓		～	↘	↘	↘	↘
3 多様な生き物を守ろう								～	↘	～	～	～	～
4 水辺も湖底も美しく					↗				↗	↗	↗	↗	↗
5 恵み豊かな水源の森を守ろう						→			～	→	→	→	→
6 森川里湖海のつながりを健全に						→			↗	↗	↗	→	→
7 びわ湖のためにも温室効果ガスの排出を減らそう					↗				↗	↗	↗	↗	↗
8 気候変動や自然災害に強い暮らしに							↓		～	～	↘	↘	↘
9 生業・産業に地域の資源を活かそう						→			↗	↗	→	→	→
10 地元も流域も学びの場に							↓		↘	↘	↘	↘	↘
11 びわ湖を楽しみ 愛する人を増やそう						→			→	→	→	→	→
12 水とつながる祈りと暮らしを次世代に							↓		↘	↘	↘	↘	↘
13 つながりあって目標を達成しよう					↗				～	→	→	→	↗

オープンデータについて

MLGs 評価報告書で使用された各種指標の元データは、原則として全てオープンデータとして公開します。これは、元データを再利用可能な形で公開することで、行政だけでなく、市民や事業者、研究者など多様な主体が、それぞれの視点で今の琵琶湖や流域の状況を把握し、またその評価について発信していけるからです。本書で提示された評価結果に疑問を持たれる方もいらっしゃるでしょう。個人によって物事に対する見方が異なるのは当然のことであり、それを明らかにして話し合うことが、ゴール13「つながりあって目標を達成しよう」の達成に直結します。そのための共通基盤として本書をご活用いただくために、元データを公開しています。

データは「琵琶湖環境科学研究センター」のWebサイトで公開しています。どなたにも再利用しやすいように、Microsoft EXCEL 形式(.xlsx)および CSV 形式(.csv)の両方で掲載しています。データは、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス(CC-BY 4.0)で公開しており、商用、非商用問わず自由に利用することができます。データを利用する際は原作者のクレジットと、データの所在リンクを表示するようにしてください。

データ公開ページ URL:<https://www.lberi.jp/investigate/motherlake21/opendata>

または QR コードから、もしくは「琵琶湖流域オープンデータ」で検索。



各ゴールの評価

